は　じ　め　に

理事　狛江研究所長　**福島　充男**

越境大気汚染という言葉で代表されるように，酸性雨は多国間にまたがる環境問題である。欧米では1970年代に森林衰退や湖の酸性化が顕在化し，酸性雨との因果関係について国際的な科学論争が展開された。しかし，各国の合意を踏まえて排出削減が実践された結果，問題は収束に向かいつつある。

これに対して，経済成長の途上にある東アジアでは，化石燃料の消費拡大によって二酸化硫黄や窒素酸化物の排出量が急増しており，都市域の大気汚染など深刻な環境問題を引き起こしている。そして，近い将来，越境汚染が増大するのではとの懸念がある。このため，欧米の研究者も参画して，現状把握と将来の広域輸送に関する研究が繰り広げられている。また，環境庁の尽力により「東アジア酸性雨モニタリングネットワーク」が本年１月に正式に稼働した。

当研究所における酸性雨研究は，1980年代の中ごろにスタートした。1987年には通商産業省からの受託研究を開始し，所内研究と受託研究を連動させる形で，原因物質の発生から環境影響の発現までの一連の過程を総合的に評価することを目標に研究を進めてきた。東アジア諸国および欧米の研究機関との共同研究も独自に展開し，観測データや評価モデルの共有を通して酸性雨問題の相互理解に努めた。これまでに得られた研究成果の前半部分は，電中研レビューNo. 31「酸性雨の影響評価」（1994年11月発行）で紹介させていただいた。

このレビューでは，それ以降の研究成果を中心に，内外の動向を含めて紹介する。21世紀を迎え，東アジアにおける経済発展と環境保護の両立を考えるうえで，いささかなりともお役に立てば幸いである。